

各地で話題の病害虫



フリかいう病

滋賀県病害虫防除所 清水寛二氏提供



アカスジメクラガメ

広島県農業試験場 林英明氏提供



ダッチアイリスの黄化腐敗病

奈良県病害虫防除所 細木圭一氏提供



イチゴコナジラミ

福井県農業試験場 岩家俊雄氏提供

フリかいう病
学名: *Pseudomonas syringae* pv.
castaneae Takanashi and Shi-
mizu 1986

近年、滋賀県のフリ園で、枝梢や幹に種々の大きさのがんしゅ、あるいはかいよう状の病斑を生じ、葉や枝が枯れ込む被害が発生している。

本病は *Pseudomonas syringae* に属する細菌によって起る病害であることが明らかにされ、フリかいう病という病名が提案された。病原細菌は昭和61年に新しい pathovar が提唱され、*P. syringae* pv. *castaneae* Takanashi and Shimizu 1986 と命名された。

本病はフリの葉・葉柄・枝・花穂・果梗に発生し、芽においては芽枯れを生じる。芽枯れには未発芽の状態で枯死するものと、発芽したのちに中心部が水浸状となり、黒褐変して枯死するものがある。葉には褐色の小斑点を生じ、のちに病斑部が脱落し、小さな孔があく。5～6月には葉の中肋部及び葉柄に黒褐色のがんしゅ状の小病斑を生じる。新梢では黒褐色の水浸斑を生じ、いぼ状に肥大して表面にざらざらしたがんしゅ状のこぶ病斑を形成する。9～11月には、遅く伸びた枝にやや隆起した火ぶくれ状の水浸病斑を形成し、翌春の3～4月にはこぶ状になり、さらに進行するとかいよう状となり、枝の先端部から枯死する。

高温時の8～9月に発病枝の割合は低下するが10月ごろから再び増加する。

フリかいう病菌は枝に形成された火ぶくれ状の病斑で越冬後、春先にかいよう症状を伴った部位から病原細菌が溢出し風により飛散伝搬する。

防除法は冬期の発病枝の切除・落葉の焼却・適正な肥培管理・春期の新梢発病枝の切除・防風対策などの耕種的方法がある。薬剤散布ではストレプトマイシン剤と銅水和剤の混合剤、6-6式ボルドー液などで防除効果が認められている。

アカスジメクラガメ
学名: *Stenotus rubrovittatus*
Matsumura
英名: Sorghum plant bug

アカスジメクラガメはイネ科の牧草や雑草を加害するが、これまでにイネの害虫としては重要視されていなかった。

ところが、最近、広島県・宮城県で本種による斑点米の被害が多発し、問題となっている。

被害米の症状は斑紋の位置と形状により、①黒色しいな米 ②黒点米類似米 ③尻黒米 ④黒蝕米の4とおりに類別される。

本種はメクラカメムシ科に属し、体長3.4～5.5mm雌の体色は黄褐色で前胸背の側縁部、前翅爪状部、後腿節などが橙赤色をしている。雄は全体に雌より色彩が鮮やかで、腹部末端は橙赤色をしている。

年4化性で、卵で越冬する。ふ化幼虫は4月中旬頃から現れはじめ、第1回の成虫は6月上旬が

発生のピークとなり、その後世代をくり返しなが
ら11月中旬まで活動する。

寄主植物はイタリアンライグラス・トウモロコ
シ・アワ・イネ・イヌムギ・メヒシバなど多くの
イネ科植物であるが、主要な寄主植物は、夏季で
はイタリアンライグラス、夏から秋にかけてはメ
ヒシバといわれている。

水田への飛来はイネの出穂開花期頃で、ここで
1世代を過ぎたのち、新成虫は水田以外の好適環
境に移動する。

防除は本虫が水田に飛来しはじめる7月下旬頃
からMPP剤、MEP剤、PAP剤などの有機リン
系殺虫剤を散布する。また、水田に移動する前の
成虫は畦畔、雑草地で生活しているのでイネの出
穂前に雑草を刈り取ったりすることが必要である。

ダッチアイリスの黄化腐敗病

学名: *Aphanomyces iridis*
Ichitani et al.

奈良県で昭和52年頃からダッチアイリスが腐敗
枯死する被害が発生しはじめた。

り病株から *Aphanomyces* 属菌が検出され、そ
の後の研究では、国内外において記載がない新病
害であることが60年に確認された。

本病は球根育成ほ場では定植後の10月頃に若干
の発生が認められ、その後、症状は進展しないが、
翌春の3月以降になると急速に進行する。ハウス
促成栽培地においては、9月の定植直後から発病
が認められ、12月の出蕾期までに枯死することが
ある。根の病徴は一部が淡褐色となり、しだいに全
体があめ色となり軟化・腐敗する。葉は葉先の黄
化からはじまり、ついで葉全体が黄化・枯死する。

菌糸は、無隔壁、主軸菌糸と分枝屈曲する側糸
から成り、遊走子のうは糸状、被のう化した第一
次遊走子塊は径10~15 μ mの球形で第二次遊走子
を放出する。蔵卵器は頂生・通常短柄・球形・垂球
形で、蔵精器は1~4個で大きく屈曲したこん棒
状、蔵精器柄は異菌糸性、卵胞子は平滑・球形で
径15~30 μ mである。本菌の遊走子はダッチアイ
リスの根の表皮細胞縫合部から侵入し、短期間の

うちに卵胞子を形成し、本病は急速に伝染する。

防除対策としては、ハウス促成栽培地では、地
表面をポリエチレンフィルムで被覆し、臭化メチ
ルによる土壌くん蒸、地表面をビニールで被覆し
て太陽熱を利用する土壌消毒法などがある。

イチゴコナジラミ

学名: *Trialeurodes packardii* (Morrill)
英名: Strawberry whitefly

昭和49年静岡県の一ツゴ施設栽培地において、
わが国ではじめてイチゴコナジラミの発生が確認
された。その後分布は拡大し、本虫によるイチゴ
の被害は数県に及んでいる。

幼虫及び成虫は葉裏に寄生し、多数発生した場
合は生育が悪くなり、すす病を併発する。

寄主植物は23科51属69種に及び、イチゴ・サン
ザシ・モモ・ウメ・リンゴ・キイチゴ・シモツケな
どの栽培植物のほか、ブタクサ・ヒメジョオン・セ
イタカアワダチソウなどの帰化植物も含まれる。

形態は施設園芸の大害虫であるオンシツコナジ
ラミに類似する。両種の識別は、蛹の背面にほぼ
直立するワックス質棘状分泌物があるかどうかに
より行う。イチゴコナジラミではワックス質棘状
分泌物が外縁と垂外縁にのみ認められ、かつ横へ
のびて直立していない。オンシツコナジラミには、
外縁と垂外縁のほか、通常頭部に1対、中胸に1
対、第3・4腹節にそれぞれ1対の長い直立した
棘状分泌物がある。蛹の形態は、イチゴコナジラ
ミではなめらかな小判型で体周にくびれがなく背
面は平らであるが、オンシツコナジラミはくびれ
が目立ち背面もかなりふくれて中高になっている。

防除対策は、ランナー(子苗)採取後掘り取った
親株を焼却するか、埋没する。発生が確認された
場合はDDVP剤、PAP剤、DEP剤の散布が
効果的である。

訂正: 前21号5頁「マツカレハ」のなかの3・4
行目の「北海道南部の本古内町を中部の富良野市」
に、18行目の「北海道南部を中部」にそれぞれ訂
正します。